ここが重要!

実臨床に役立つ山本巌の「虚実論」

◎日本漢方の「虚実」の定義が漢方を難解にしている!

漢方で重要な「虚実」の概念について、日本漢方には定説がなく、病人を「虚実」というカテゴリーで絞り込み、虚証・中間証・実証として分類している。そしてこの「虚実」は、正気(体力)についてのみいっている。

この「虚実」の捉え方が漢方を分かりにくくしている理由の一つだろう.

*

正気が虚(不足)している病人は「虚証」であるとし、正気が充実している病人は「実証」として治療する、と簡単にいわれている.

しかしながら、これはよく考えてみるとおかしな話である.

*

漢方治療には補法と瀉法とがあり、「虚」は補い、「実」は汗法(発汗させる)・吐法(吐かせる)・下法(下す)で瀉す(除去する)のが原則である.

「虚証」なら不足している正気を補うのは当然だけれど,正気が充実しているのを「実証」とするなら,なぜ病人の正気を瀉して体力を弱らせなければならないのだろうか.

*

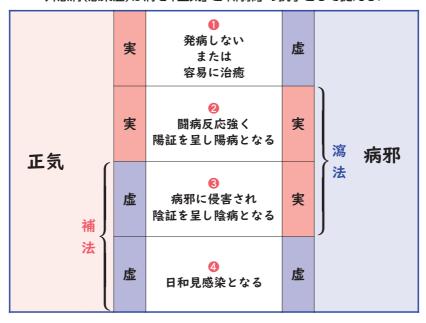
この「実証」を「生体反応が強い状態である」と苦しい解釈をする者もいるが、これについて山本巌は、「生体反応が強い状態は『陽証』と考えるほうが良い」と教えた.

山本巌は「虚実」を次のように定義する

「虚」というものがあるわけではなく、「実」というものがあるわけでもない。要は何が虚し何が実しているかであり、「虚実」とは人体の抵抗力と病邪の力関係を示す尺度である。正気(闘病力、体力)にも虚実があれば、病邪にも虚実がある。病気について考える場合、外感病(病邪が外から正気を侵して発生する病で、つまり感染症)と内傷(栄養失調、栄養過多、精神的苦悩など)とに分けて考える。

●外感病(感染症)での虚実の捉え方

外感病(感染症)は病を「正気」と「病邪」の抗争として捉える.



※陽病も正気が失墜すると陰病になる.

①……正気の実 VS 病邪の虚

正気が実していれば、緑膿菌やブドウ球菌などの弱毒菌である病邪は正気に勝てないため発病しない.しかし暴飲暴食や夜更かし、過労やストレス、手術などで正気が虚すると弱い病邪にも負けて発症する. それでも正気が回復すれば、正気が病邪を叩いて治る.

*

②……正気の実 VS 病邪の実

正気が実していても病邪が実の場合は、発病すると正気と病邪の抗争反応が強く病状は激しく、陽証を呈し陽病に分類される。『傷寒論』ではこれを病位により太陽病・陽明病・少陽病の三陽病に分類する。治療は病邪を瀉し、正気が病邪に勝てば治る。

*

③……正気の虚 VS 病邪の実

正気が虚であり病邪が実であれば病邪に侵害され、闘病反応は弱く、症状は陰証を呈し陰病に分類される.『傷寒論』ではこれを病位により、太陰病・少陰病・厥陰病の三陰病に分類する. 初めは②でも正気が弱り③に転入することもある. 細菌に侵されても闘う力がないため、症状は病気ではないように静かで、ただ体がだるく眠たくてくたびれる. 陰病ではまず正気を補い②の陽病としてから病邪を瀉して治療する.

*

4 ·····正気の虚 VS 病邪の虚

癌や糖尿病、免疫不全や免疫力の低下した者は正気が虚しているため、 緑膿菌や MRSA などの弱毒菌にも発病し日和見感染のようになる. 感染症 で今一番問題になっているのはこの日和見感染症である. 放射線や抗がん 剤、手術や免疫抑制剤などにより正気が虚して、そのために弱毒菌にも感 染する. だから MRSA などは抗生物質をどんどん強くしても治らない. むしろ正気の方が逆にやられてしまう. 抗生物質で病邪を攻めることもよ いが、正気の虚は補ってやらないと治らない. そこで正気の虚をしっかり 補えば①の「正気の実 VS 病邪の虚」の状態になって、正気が病邪を叩い て治る。MRSA などは正気を補うだけで、すなわち補中益気湯などをどっ さりやるだけで良くなる。

西洋医学治療は「病邪の実」を叩くことは上手になった反面,正気を補うことが免疫グロブリンや輸液,強心剤などしかなく不得意である。老人の肺炎も,「病邪の実」を瀉すだけではなく「正気の虚」は補わねばならない。

外感病(感染症)の虚実で問題なのは「正気の虚」と「病邪の実」である。そして「正気の虚」は補い、「病邪の実」は 瀉すのが治法の原則である。

このような考え方は、従来の日本漢方や中医学、そして西洋医学にもなかった新しい医学理論であり現実の臨床に合致した治療指針である。山本巌が患者と薬を一番の師とし、豊富な臨床経験を検証し続けた結果から生まれた「虚実論」であり、応用は無限である。

●内傷(栄養失調,栄養過多,精神的苦悩など) 雑病(慢性疾患)における虚実の捉え方

「内傷」には正気と病邪の抗争はなく、自分の体が弱って病気になる. したがって病は「正気の虚」によって起きる. 正気が実していれば問題はなく、「正気の虚」が問題で. 「正気の虚」は補わなければならない.

この正気の虚を分類して気虚、血虚、陽虚、陰虚とする。

「雑病(慢性疾患)」は内傷だけでなく、身体内部の病邪によっても発生する。 整血、水湿、気滞などとして先人が捉えていたものも含まれる。 この場合の治療には、病邪を除き正気を助ける「扶正去邪」を行う。 正気を助けることを「扶正」といい、病に対する抵抗力・治癒力を増強する。「去邪」は病邪を取り除く瀉法が主で、汗法(発汗させる)、吐法(吐かせる)、

下法(下す), 和法(和解し調える), 清法(清熱する), 消法(食滞を通じる) などの方法がある.

内傷における虚実と治法

正気	実	発病せず 治療の必要はない
	虚 気虚・陽虚 血虚・陰虚	補法 (正気の虚を補う)

雑病(慢性疾患)における虚実と治法

正気	虚 気虚虚 過虚 陰虚	扶正去邪 計法と瀉法 {	実 瘀血 水湿 など	病邪
----	-----------------------------	-----------------	---------------------	----

以上, 山本巌の虚実の定義を概説した.

臨床の実際では、「正気の虚」と「病邪の実」が同時にあることの方が多い、ところが、「病邪の実」のために「正気が虚」した場合は、「正気の虚」を補うだけでは正気は回復しない。「病邪の実」を瀉してやれば、正気は自から回復してくる。「正気が虚」していても、ただ「正気の虚」を補えばすむのか、「病邪の実」を瀉すことが必要なのか、先瀉後補、先補後瀉、または補瀉兼施すべきなのかを判断するのが治療の実際である。